

本日の箇所は「指導者の娘とイエスの服に触れる女」という小標題からも二つの伝承が組み合わされて編集されたことが容易に分かります。この9章では1-17節で三つの論争物語、そして18-31節には共通テーマによる三つの治癒物語が配置されています。この共通テーマとは奇跡がなされる契機としての信仰です。

この箇所もマタイはマルコから得ています(マルコ5;21-43)。マルコは二つの物語を組み合わせる文学手法を度々用います。これによって同時進行する二つの事件を緊張関係に置くためです。父親の懇願によって娘のところへ行く途中、病気の女性が現れたため、イエスの行動が遅れ、娘は死んでしまったという具合に適度な緊張感を含んだ叙述をマルコは得意としていました。

ところが、マタイはいつものように大幅な省略を施します。物語全体を三分の一ほどにまで短縮するのです(原文ではマルコが383語、マタイは137語)。ここではイエスの行動を遅らせる記事も弟子たちの無理解というマルコの神学的モチーフも徹底して削除されています。それでは、マタイはこの物語を通して何を問うたのでしょうか。

マタイはイエスとこの女性の関係に集中します。彼女は病気であるがゆえに、人に触れることをはばからねばならない身であり、社会的に隔離された者です。マタイは群衆の人垣も弟子たちの記事もすべて取り払い、ここに描かくのはイエスと背後から触れる彼女の姿だけです。その行為は彼女の自らの立場をわきまえた謙虚さから来ています。マタイはまずここに第一の焦点を置きます。それは、「痛みを持つ者は面と向かって正面から声を上げられない」という事実です。後から声もなくそっと触れることが精一杯なのです。

第二の焦点は、衣に触れた彼女をイエスはすぐに発見し、励ましの言葉をかけます。言葉にならない彼女の苦しみを見抜いて救いの宣言を与えるのです。マルコでは衣の房に触れた時にいやされますが、マタイはそんなことは描きません。イエスのこの「言葉」(22)

によってのみいやされたのだと描き直すのです。

続く娘の蘇生も同じ内容が記されます。痛みの極みを死と表現するならば、娘は何も訴えることはかないません。病い・障がい・不当な差別等、声を上げられない痛みは数え上げればきりが無い位です。そのような社会や現実にあつて、あなたは愛する者にどう寄り添うのかをマタイは問い直すのです。ここではその役割を父親が担います。娘は死んだとの報告を携えてなおイエスに懇願します(18)。マルコでは父親は途中で娘の死を知って諦めてしまいます。しかし、マタイはここで父親の一貫した信仰へと書き換えるのです。それは、声を上げられない者には必ず助け手が必要であるということを示しています。

奇跡物語とは超常現象や待っていたら何とかしてもらえるとといった妄想ではありません。かと言って彼女たちを救ったのは彼女たちの手柄でもありません。

それはイエスの力、つまり「痛み」を持つ者と共に生きようとする「イエスの言葉」－これを「福音」といいます－を信じる信仰が彼女たちを救ったのでしょう。ここに「いやしの根拠」があるとマタイは宣言するのです。